

聖書：Iサムエル1：1～28

説教題：サムエルの誕生

日時：2015年6月28日

今夕からサムエル記を開きたいと思います。サムエル記は時代的に士師記の次に位置します。士師記はイスラエルの暗黒時代とでも言うべき時代でした。その時代を一言で言い表す御言葉として士師記17章6節にこうありました。「そのころ、イスラエルには王がなく、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行なっていた。」これは士師記最後の21章25節にも全く同じ表現で出て来ます。当時のイスラエルは一つの神の民としてのまとまりがなく、それぞれがバラバラに歩み、道徳的にも退廃の一途をたどる時代でした。このような時代からどのようにしてイスラエルの王が誕生したのかを書き記しているのがこのサムエル記です。またイスラエルが周りの国々にならって王を持ったことは良いことだったのか、神の御心にかなうことだったのかという問いもこの書を通じてあります。ご存知の通り、イスラエルの王制は最後にバビロン捕囚の憂き目にたどり着きます。ではこの書は思い出して後悔するだけの書なのかというと、そうではない。神はこれらの出来事を通して、やがて与えて下さるメシヤの支配、来たるべき王による栄光の御国の希望、約束を示して行って下さるのです。

このサムエル記では、主に3人の人物に焦点が当てられます。一人目は最後のさばきつかさとも言うべきサムエル、二人目はイスラエル最初の王サウル、そして三人目はイスラエル王朝時代の確立者となるダビデです。今日は最初のサムエルの誕生についての話です。

まず見て行きたいのは、神の働きはどのような状況から始まったかということです。最初に登場して来るのはエルカナという人物です。彼には二人の妻がいました。一人はハンナ、もう一人はペニンナ。おそらくハンナが先に結婚したのでしょう。しかし子どもが生まれなかったために、エルカナはペニンナをも妻に迎えた。もちろん聖書はこのようなあり方を良しとしているわけではありません。創世記2章に「男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となる」とありますように神の御心は一夫一婦制です。しかし古代世界では家系が絶えてしまわないように、また土地の相続のために、お金持ちの家ではこのようにする習慣がありました。聖書はその現実をそのままに記していますが、同時にこのような結婚は決して祝福に至らないことも、事の成り行きを通して暗示しています。

今日、注目したいのはハンナです。彼女は本人でなければ分からない苦しみの中で

生活していました。その家には子を得たペニンナも一緒にいました。6 節に、ペニンナはハンナを憎み、ハンナが気をもんでいるのに、彼女をひどくいらだたせるようにしたとあります。そのため、ハンナはせっかく主の宮に上り、神との和解の食事をしようとしても、食べ物をお口にできるどころの精神状態ではなかった。このような悲しみ、苦しみの中でハンナは生活していたのです。ところがこのサムエル記 1 章で私たちが見るのは、この彼女から神の新しい働きが始まっていくということです。

聖書ではしばしば不妊の女が特別に神に祝福される話が出て来ます。アブラハムの妻サラ、イサクの妻リベカ、ヤコブの妻ラケル、新約でもバプテスマのヨハネの母エリサベツがそうです。神はここに明確なメッセージを持っています。それは、神はご自身のみわざを、ただご自身の一方的な恵みによって行なわれるということです。人間が人間を誇り、人間に栄光を帰すことがないように、神はあえて弱者、無に等しい者を選ばれる。天地創造のみわざがそうであるように、神は「無」から「有」を生じさせることのできるお方です。ですから私たちが「無」であることは、神にとって何の問題でもありません。いやむしろ私たちが「無」であるところから神のみわざは始まるのです。

ですから私たちがもし自分を省みて、無であること、能力がないこと、貧しい者であることを思っても、あまり失望し過ぎるべきではありません。私たちがどんなに無能で、自分に幻滅していても、それが神の働きの妨げになることはないのです。むしろ無であることが、神の働きを期待できる条件とさえ言えるのです。「私は、…むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。…私が弱いときにこそ、私は強いからです。」

またハンナはもう一人の妻ペニンナからいじめられていました。そのために食事さえのを通らない状況に置かれていました。しかし私たちがここに見るのは、そういう状態に置かれた彼女から、イスラエルに対する神の大きな働きが始まるということです。このことは私たちが日々経験する困難や苦しみを違った光のもとで見させてくれるものではないでしょうか。良いことが何もそこにはない、従って絶望しかないと思われる状況も、決して軽蔑すべきものではないのです。ハンナの置かれたこの苦境は、神の偉大なみわざが始まるための前奏曲でした。私たちはそのように自分の状況を見つめ、無からみわざを始めて下さる神様を見上げるようにここから導かれるべきではないでしょうか。

ではその神のみわざにあずかるために私たちに必要とされることは何でしょうか。続く記事に私たちが見ることは、ハンナが神の恵みの御座へ逃れて行ったということです。10 節に「彼女は主に祈って、激しく泣いた。」とあります。また 12 節に「主の

前で長く祈っている間、云々」とあります。祭司エリはハンナの唇が動くだけで、声が聞こえなかったので、彼女は酔っているのではないかと思いましたが、そうではありませんでした。15 節にありますように、ハンナは心を注ぎ出していたのです。つのる憂いといらだちのため、そのように祈っていたのです。ある人は、ハンナはこの祈りにおいて主の御前における自由を経験していたと言いました。一瞬そう言われて、これが自由な姿なのかとも思いましたが、確かに自分の祈りを振り返ってみるとどうでしょう。私たちは彼女のようにありのままをさらけ出して祈る自由を知っているでしょうか。ただきれいごとを述べるだけで終わってしまっていることはないでしょうか。

ハンナの祈りから教えられることは、私たちも彼女のように祈って良いのだということ。もっと自分の憂いを、嘆きを、心の底にある悲しみ、叫び、心配をそのままストレートに神に告げる祈りをして良い。詩篇にはそのような祈りがたくさん見られます。詩篇 142 篇：「私は主に向かい、声をあげて叫びます。声をあげ、主にあわれみを請います。私は御前に自分の嘆きを注ぎ出し、私の苦しみを御前に言い表します。」こういう祈りはレベルが低い祈りではなく、むしろ私たちの祈りの模範、手本として与えられています。神は私たちがそのような祈りをするを許して下さるお方です。人間は他人からこのように心情を吐露され、嘆きをたくさん告げられると迷惑がりますが、神はそのような私たちの祈りを厄介なこと、ウンザリするものとはされません。私たちは自分の心の嘆きを、叫びを正直に神に話して良いのです。

もちろんハンナはただ嘆いてばかりいたのではなく、しっかりと神を見ています。11 節で「万軍の主よ」と彼女は呼びかけています。これは敵の数がどんなに多くても、それにはるかにまさる力と富を持っている神への信仰を表す言葉であり、私たちの戦いや課題のために、その全能の力をもって共に戦って下さる主を告白する言葉です。ハンナは自分に付いていて下さるのはこのような万軍の主であり、この方が貧しい私をも御心に留め、その全能の力を発揮して下さると告白しています。その全能者を仰いで、御前でカッコつけず、ありのままの状況・窮乏を告げて安らぐ自由を彼女はエンジョイしていた。

ピリピ 4 章 6 節：「何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。」神は私たちが祈る前から、私たちの悩み、願いを知っていますが、私たちはそれらを神に告げることを通して、私はこの問題を神に知って頂いたと知る経験をします。神はすべて知っているからと言って祈る作業を省くのではなく、自分の心にある憂い・嘆き・問題を、

そのまま神のもとに持って行ってお話しし、みもとに荷を降ろす。その時、確かにこれについて私は神に知って頂けた、神はこのことのために私に最善を取り計らって下さるだろうとの確信に立つことができるのです。この祈りの後、ハンナの顔はもはや以前のようなではなかったと 18 節にあります。これは彼女が神に知って頂き、祈りの中でみもとに荷を降ろすことができたからに他なりません。そして彼女は帰って食事をすることができました。

私たちも時に、食事ものどを通らない苦しみを経験するかもしれません。しかし神は祈りを通して私たちを慰め、新しい力に生かして下さいます。食事をする元気を与えて下さいます。私たちもこのハンナのように祈る自由をもっと知って行くべきではないでしょうか。嘆きの中にある自分を、無である自分をそのまま持って行って、神に知って頂く幸いを知るべきではないでしょうか。神はそのような祈りを決して軽んじず、豊かな恵みを持って答えて下さるのです。

最後に見たいのは誓いを果たしたハンナの姿です。彼女はサムエルを授かり、その子が乳離れするまで育てた後、祭司エリのところへ彼を連れて行きます。ハンナが祈って子どもを授かった話は美しいものですが、もし彼女がその後、誓いを果たさなかったら、この箇所は非常に後味の悪い、読む人がみながっかりする箇所となつたでしょう。確かに人間的な思いとしては、せつかく得た我が子を手放したくはありません。毎日可愛い顔を見ていれば決心が鈍って来ることもあり得ます。生まれ付きずい傾向を持っている私たちは時々、ある切実な願いごとのために「神様、今度はこれこれこのようにしますから、是非是非この願いを聞いて下さい。」と祈っておきながら、無事そのことが守られた後は、以前の誓約を守らない、それを果たさないということがあるのではないのでしょうか。しかしハンナはここで誓いをしっかり実行しています。ここに彼女の敬虔さがあかしされています。ハンナは 27 節 28 節で言いました。「この子のために、私は祈ったのです。主は私がお願いしたとおり、私の願いをかなえてくださいました。それで私もまた、この子を主にお渡しいたします。この子は、一生涯、主に渡されたものです。」そして私たちが注目すべきは、このようにして彼女がささげたサムエルが、これから神によって豊かに用いられ、イスラエルで大きな働きをするということです。もしこの箇所が、ハンナが祈って子を授かるだけで終わっていたら、それだけの話です。しかし彼女が感謝して神にささげたこの行為をもって、神の働きは本格的に始まり、そのご計画は大きな展開を見せて行くことになるのです。

ですから神は私たちをもただ受けるだけの歩みに召していません。私たちが神の恵みに感謝し、応答の歩みをささげて行く時に、それを用いて神の偉大な働きが始まり

ます。どこから始めたら良いでしょう。それは今日見て来ましたように、自分が無であることを思うなら、神の恵みの御座へ行くことです。様々な困難や絶望的な状況があるなら、神はハンナのように、ご自身のもとに私たちがそれらのことを持つて来ることを望んでおられます。私たちがそのことを主に告げて主と共に歩む時、私たちは無から有を造り出す万軍の主を守られて歩む幸せを知る者となります。そしてその主との交わりの中で、私たちが主に感謝して主への応答の歩みをささげて行く時に、主は私たちがささげるものを喜んで用いて、ご自身の新しいみわざを進めて下さる。ハンナがささげたものは大切なわが子サムエルでした。私たちにとってそれは何でしょう。それはそれぞれが主との交わりの中から導かれることでしょう。ある人にとってそれは時間をささげることであり、ある人にとっては自分の能力・賜物をささげることであり、またある人にとっては財をささげることであり、ある人にとっては何らかの意味で主に役立つ大切なものをささげることでしょう。そして何よりもそれは自分自身とその生活をささげることでしょう。主に喜ばれる服従の生活をささげることでしょう。主はそれを用いて、さらに大きなご自身の御心を進め、私たちを祝して下さいのです。

何も良いことがないように見えたサムエル記最初の章。ただ嘆きと悲しみと不幸が満ちていただけのように見えたⅠサムエル記Ⅰ章。しかしそれは神の新しい働きが始まるための舞台であり、また序曲でした。私たちもこの光のもとで自らの生活を捕らえ直し、ハンナのように、恵みの御座へ招いておられる主のもとへ行く者でありたいと思います。主にすべての悩み、苦しみ、心配を告げ、主に知って頂く幸いに生かされたいと思います。そしてこのような者を顧みて下さる「万軍の主」を知り、喜びを持ってこの方に応答する生活へ、またその私の応答を神が用いて、さらに豊かに御心を現わし、祝福して下さる歩みへ進んで行きたいと思います。